

巻頭言



ウィズコロナからポストコロナへ  
— 2022年から始まる大変革—

From With-Corona to Post-Corona  
— Game change will commence in 2022 —

副理事長 細川隆司

巻頭言を述べさせていただく前に、本学会の国際誌である JPR のご支援について一言お礼を述べさせていただきたいと思います。昨年、JPR 誌は過去最高の IF 値 4.642 を獲得し歯学領域の Q1 ジャーナルとして確固たる地位を築くことができました。また、科研費の研究成果公開促進費の交付が決定され今後 5 年間にわたり総額 2 千万円弱の補助金が下付されることとなりました。前 JPR 編集委員会委員長として会員諸氏のご支援に心より感謝申し上げます。今年度よりスタートした江草委員長率いる JPR 編集委員会は、期待通り、いやそれ以上の素晴らしい活躍を見せてくれています。今後も JPR のさらなる発展に向け、皆様のご支援を心より願う次第です。

さて、COVID-19 の感染拡大によって、長期間にわたり大学はオンライン講義となり、本学会の主要な会議もオンラインでの開催に変わりました。人と人との接触を最小限にするという意味では、オンラインによるコミュニケーションは最善の解決策であることは間違いありません。しかし、このオンラインコミュニケーションの急速な普及により、感染リスクを避けるという本来の目的を遥かに超えるムーブメントが起きてしまったように思います。今回のコロナ禍によって、大学における学び方に大きな変化が生じたことで、大学がどうあるべきかが真剣に問われ始めました。大学における教育は、今後どのような社会状況になろうと『いつでも』『どこでも』学べるようにしてほしいというのが、学生の希望であり社会の要請なのかもしれません。

Society 5.0 を迎えるに当たって、AI、IoT、ブロックチェーンといったスマート技術が、教科、試験、学校といった学びの内容、環境、評価を問い直す変化をもたらす可能性があります。学生の受け入れに関しても、今回のコロナ禍によって入試が多くの制約を受けましたが、ブロックチェーンで個人の学習履歴をすべて蓄積すれば、将来は入試におけるペーパーでの学力試験が不要になる時代が来るかもしれません。このような状況において、大学教育においては、これまでの IT 活用や LA といった学修方略の改革に留まらず、AI、IoTなどを駆使したビッグデータの活用方法、サイバーセキュリティなど、次世代の歯科医師に必須のリテラシーをも教えて行く必要があります。われわれ補綴歯科学会も、ポストコロナの時代に向けて大きく変わっていく必要があるように思います。このことについては、馬場理事長が就任時の講演で Society 5.0 に向けた素晴らしいビジョンを示されていました。われわれの学会も、そして歯科補綴学に関する臨床や研究や教育においても、DX（デジタルトランスフォーメーション）によって革新的な変化が求められているのは間違いありません。

加えて、学会としての変化という切り口で言えば、2022 年は大きな変化が確実に来そうです。現在、議論が進められている新しい歯科専門医制度が動き始めようとしています。2002 年に医療機関の広告規制の緩和に伴い、医師又は歯科医師の専門性に関し、告示で定める基準を満たすものとして厚生労働大臣に届出がなされた団体の認定する資格名が広告できることとなり、さらに 2007 年に団体（学会）の外形基準が新たに示され、多く

の学会がそれぞれの専門医を申請し、いわゆる『広告可能な専門医』として広く社会に認知されるようになりました。本学会は、厚生労働省告示に示された外形基準を満たしていたため広告可能な歯科専門医資格としての申請を単独で厚生労働省に提出していましたが、認可の決定がされない状況が続いていました。

その後、医科の『専門医』のあり方を再検討しようという動きが出て、2014年に一般社団法人日本専門医機構が発足しました。歯科では、その動きに追随する形で2018年に一般社団法人日本歯科専門医機構が設立されました。その日本歯科専門医機構において、最優先で新たに認可すべき広告可能な専門医（歯科の専門性資格）の一つとして『補綴歯科専門医（仮称）』が俎上に上がり、現在、本学会では、認可に向けて大詰めの段階を迎えています。

前述の日本歯科専門医機構による歯科専門医の定義は『それぞれの専門領域において適切な研修教育を受け、十分な知識と経験を備え、患者から信頼される専門医療を提供できる歯科医師』とされています。2022年は、このような第三者機関による歯科補綴専門医制度の運用と認証が開始されようとしている歴史的転換点となりそうです。

2022年が、本学会としても飛躍の年になりますよう、そしてコロナ禍の終息を心より願いつつ、巻頭の言葉と致します。